「松屋十八景記」訳注稿

谷本圭司*

はじめに

本稿は、徳山藩第三代藩主、毛利元次候が選んだ十八の徳山の名勝を、桂方直が文章として記した「松屋十八景記」の訳注を試みたものである。

近世の徳山に優れた文化が花開いたことは、渡辺憲司『近世大名文芸圏研究』八木書店 一九九七刊（ISBN4-8406-9602-0 C3095）によって、つとに指摘されている。しかし、徳山高専の学生たちにそのことを知る者がほとんどいないことに戸惑い、かつ残念に思い、比較的読みやすいこの文章を、四年次選択科目の講義において取り上げた。

その後、井上直樹校長、土木建築科目山直樹准教授の勧めもあり、微力ながら地域への貢献の一端になればと、講義用資料の注釈部分を大幅に増補し、ここに掲載することにした。

［凡例］

・本文の底本は、周南市立図書館中央図書館ＷＥＢサイトの、郷土資料ギャラリー→中央図書館所蔵画類→『徳山名勝』に、全二四頁の見開き写真版として公開されている、徳山藩三代藩主毛利元次が宝永三（一七〇六）年に刊行した『徳山名勝』である。
https://library.city.shunan.lg.jp/bunka/chuoshoga76.html

・底本の不鮮明箇所は、徳山市史編纂委員会編『徳山市史史料』全三冊（一九六四～一九六八）の、上冊二五三～二五四、下冊四〇六～四〇七頁に翻刻されているものを参照した。

・改行は、景ごとに施したが、あくまでも講義に際しての読解を考慮しての処置であり、本来は不要と考える。

・書き下し文については、もともとの本文に記された訓点に従い、修正、補完は最小限にとどめ、通釈に意を注ぐことにした。

・通釈は、徳山高専の学生（四、五年生）を対象に、努めて平易を心がけて作成したつもりであるが、安易な説明に傾きすぎたきらいもある。諸賢のご教示をいただければ、幸いに思う。

・注については、煩雑にわたることを避けて原文のみを記すことにし、記が書かれた当時の漢文を学ぶ者にとって、重要であったと推測される文献に範囲を絞って用例を挙げた。しかし、『事文類聚』や『群芳譜』のような類書等によって得られたであろう語彙の知識についての調査は不完全であり、今後、より詳細な検討を行いたいと考えている。また、『防長寺社由来』、及び『徳山市史史料』全三冊に収録された、享保～寛延年間の『地下上申』、及び、河合裕『藩史』等に見える関連の記述を加えた。

［本文］

松屋十八景記

元禄丁丑秋、周陽徳山之主元次君、營新亭於苑囿之中矣。亭之左右前後皆松也。故傍曰松屋也。腹東南背西北、故冬暖夏涼也。亭上所観景物衆多而不可枚挙也。公時時賁臨撮其尤者十有八箇而書之壁間爲斯亭標的。不偉乎。一日命僕記其事也。

惟夫

斧斤長赦、艸木蓊蔚而不辨秋冬者、城山茂陰也。
日迫虞淵、鴉投棲處、華鯨哮吼者、興元梵刹也。
千株櫻花、如雲若雪、白浪滔天、香風滿袖者、馬場之逸興也。

*一般科目

時維夏而薫風自南來、亭上生微涼者、相島峻嶺也。
晴鏡飛上、高揚明輝者、大河内秋月也。
回眸八坳、則滕六降雪、玉塵濺林、驢背之詩思、勃然生矣。
夕日照泉原、而映楓入松也。
艇艇帆風、共帰濱崎、魚市沽衒、喧嘩譊譊矣。
蛇島、崛起海上、形容奇怪也。屋上以是爲盆石、不宜乎。
席上観海、則波瀾千里、天光一碧、鶴汀鳧渚、化工鎔冶、而非所人力布置按排也。
且漁舟亂雑、浮海歌曲、喚聲相答者、金崎朝暮也。
振古以雨奇晴好爲西湖絶勝、野島亦然。以過雨執之也。
列松當南、齊整無長短、左右雍道、何其稠茂乎。
至若擔薪策羸、相呼相應者、前路樵人也。
民居富饒、則朝夕之煙、續續不斷。如是則辻村炊煙、濃淡繫民肥瘠也。
又、注目於福田相向、則千仞之壁崖、如立十里歩障也。
爽嵐入松濤聲徹耳、午睡半驚恍如泊江湖也。
民邦本、本固邦寧。耕耘収蔵、朝出晩帰、晝于茅、宵索綯、勤力以養人。共皆屋前對田所視察也。
　吁嗟、時豊干戈横偃而人人置枕泰山。當今代所謂先憂而憂、後樂而樂、我君公、何愧之乎。

元禄戊寅仲秋日　　桂氏方直（字、敬義。號、蟠臥）誌

［書き下し文］
松屋十八景記
　元禄丁丑の秋、周陽徳山の主 元次君、新亭を苑囿の中に営す。亭の左右前後は皆 松なり。故に傍して松屋と曰ふなり。東南を腹にして西北を背にす。故に冬は暖かにして夏は涼しきなり。亭上 観る所の景物 衆多にして枚挙すべからざるなり。公 時時 賁臨し其の尤なる者 十有八箇を撮りて之を壁間に書せしめて斯の亭の標的と為す。偉ならざるか。一日 僕に命じて其の事を記せしむるなり。
　惟うに夫れ
斧斤より長く赦されば、艸木の蓊蔚として秋冬を弁ぜざる者は、城山の茂陰なり。
日 虞淵に迫り、鴉 棲処に投ずるとき、華鯨の哮吼せる者は、興元の梵刹なり。
千株の桜花、雲のごとく雪のごとく、白浪の天に滔（はびこ）り、香風の袖に満つる者は、馬場の逸興なり。
時 維れ夏にして薫風南より来り、亭上 微涼を生ぜし者は、相島の峻嶺なり。
晴鏡飛び上り、高く明輝を揚ぐる者は、大河内の秋月なり。
眸を八坳に回らせば、則ち滕六 雪を降らせ、玉塵 林に濺ぎて、驢背の詩思、勃然として生ず。
夕日は泉原を照らして、楓に映じ松に入るなり。
艇艇 風に帆かけて、共に濱崎に帰り、魚市 沽衒、喧嘩 譊譊たり。
蛇島、海上に崛起して、形容は奇怪なり。屋上 是れを以て盆石と為すは、宜ならざるか。
席上 海を観れば、則ち波瀾千里、天光一碧、鶴汀鳧渚、化工の鎔冶にして、人力の布置按排する所に非ず。
且つ漁舟 乱雑にして海に浮かび、歌曲 喚聲 相ひ答ふる者は、金崎の朝暮なり。
古に振り雨奇晴好を以て西湖の絶勝と為す。野島も亦た然り。過雨を以て之を執るなり。
列松 南に当たりて、齊整 長短無く、左右 道を雍す。何ぞ其れ稠茂なるか。
薪を擔ひ羸を策し、相ひ呼相ひ応ふがごとき者に至りては、前路の樵人なり。

民居 富饒なれば、則ち朝夕の煙、続続として断へず。是くのごときは則ち辻村の炊煙、濃淡は民の肥瘠に繋がるなり。
又た、目を福田に注ぎ相ひ向へば、則ち千仞の壁崕、十里の歩障を立つるがごときなり。
爽嵐 松に入り、濤聲 耳に徹し、午睡 半ば驚く。恍として江湖に泊まるがごときなり。
民は邦の本、本 固ければ邦 寧し。耕耘収蔵、朝に出て晩に帰り、昼は于茅、宵は索綯、勤力して以て人を養う。共に皆 屋前の対田 視察する所なり。
吁嗟、時豊かにして干戈 横に偃して人人枕を泰山に置く。今の代に当たりて、謂ふ所の「憂に先んじて憂ひ、楽しみに後れて楽しむ」こと、我が君公、何ぞ之に愧ぢんや。

元禄戊寅仲秋の日　　桂氏方直（字、敬義。號、蟠臥）誌す

［通釈］

松屋十八景記

元禄丁丑（ひのとうし）の年の秋、周陽徳山の領主（毛利）元次さまは、新たに亭を庭園の中に造営なさった。亭の左右前後はすべて松林である。それで側に記して松屋とお呼びになった。（この松屋は）東南（の海側）に面し、西北（の山側）を背後にする。それゆえ、冬は暖かく夏は涼しい。（さらに）亭にあって観る（すぐれた）景物はいちいち数えあげられぬほど多い。元次さまは、時々に来訪なさって、その中のとりわけすぐれた十八の景物を選びとりあげ、これらを亭の壁間に書かせて、この亭の（景物の）手本となされた。なんと素晴らしいことではないか。
（かくして）ある日、（元次さまは）私めに命じて、その（十八の景物についての）ことを文章に記させなさったのである。

思うに、
斧で切られることから長きにわたり免れ、草木は盛んに生い茂って秋冬にも変わらずに（青々としてい）るのは、城山の鬱蒼とした森である。
日が没するところに迫り、鴉が寝ぐらに帰ろうとするとき、暮れ六つの鐘を響き渡らせるのは、興元寺である。
（春に咲く）千本の桜の花は、雲のように雪のように、白く立つ波の天空にまで溢れひろがるかのように、芳香をはらむ風が袖をいっぱいにするのは、馬場のすぐれた趣きである。
時節の夏ともなれば、薫れる風が南から吹き、松屋に微かな涼を生じさせ（何ものにもとらわれぬ境地を感じさせ）るのは、相島（＝大島）の険しい嶺である。
澄んだ鏡のように丸い月が天に上り、高く明るい輝きをかかげるのは、大河内の秋の月である。
目を八久保山に回らすと、（雪を降らせる神の）滕六が雪を降らせ、白玉の塵のような雪が林に降り、驢馬の背に揺られて起きるという詩を作りたいとの思いが、にわかに沸き起こってくる。
夕日が泉原（の丘）を照らして、（紅の光は）楓に照り映え、松に差し込む（美しい様子）。
それぞれの漁船が追い風に帆を掛けて、ともに濱崎（の港）に帰り、魚市での売り買いに、大声を上げて乱れ騒ぐ（のも趣きのある様子）。
蛇島は、海上に聳え立って、姿かたちは何とも不可思議である。松屋から（眺め見て）この島を盆石に見立てるのは、（まことに）もっともなことよ。
（松屋の）席にあって（広々とした）大海を観ると、（穏やかな）波立ちは千里の彼方に続き、日の光に海も空も青々と一つの色に（染まり）、鶴と鳧のいる（静かな）波打ち際（が目には映り）、（この様子は）造化の神の鋳造であって、人間の能力で準備し配置できるもの

では（到底ありえ）ない。
一方、漁船が入り乱れて、海に浮かび（漁師たちが）歌を歌い、声高に叫び答え合うのは、金ヶ崎の朝夕の様子である。
昔から、雨でも晴れてもそれぞれによい景色で趣き深いのを、（中国にある）西湖の特に優れた景勝としている。野島もまた同様である。
（野島を）通り雨の過ぎて行く様子を（西湖の景勝に）結びつけたのである。
松並木は南に面し、整然としていて長さはまちまちではなく、街道の左右を包みこむ。なんと密に生い茂っていることよ。
薪を担ぎ痩せ馬に鞭打ち、呼び合い答え合うことのはなはだしいのは、（松屋の）前の路を行く柴刈りの者たちである。
民くさが富んで豊かであると、朝夕の炊事の煙は、絶え間なく続く。このようであるのは、辻村の炊事の煙で、その濃淡は民が肥えているか痩せているかに結びついている。
さらにまた、目を福田寺にしっかり向けて見ると、千尋の絶壁が、まるで十里にわたって錦の幕を張って立てたかのようである。
爽やかな山靄が（風とともに）松林に入ると、松籟（の音）は耳にしみとおり、昼寝は半ば覚める。ぼうっとして、あたかも（荘子にいう、魚がその存在を忘れてのびやかにいられる）江湖に泊したかのようである。
（書経にいうように）民は国の本であり、本がしっかりすれば国は安定する（もの）。（春夏には）田畑を耕し雑草を除き（秋冬には）農作物を収穫して貯蔵し、朝には野良に出て晩には住まいに帰り、昼は茅を刈り、夜は縄をない、力を惜しまず日々を勤めて、人を養育していく。ともに全て、松屋の前に広がる田に見える様子である。
　ああ、豊かな時世に干戈（＝戦のための武器）を横たえたままにして、人々は泰山のようにしっかりと落ち着いた時勢に枕を置いて安んじて（生きて）いる。今の（元次さまの）代において、（「岳陽楼記」に）言うところの「（天下国家の）憂いごとには（人々に）先んじて心配し、（天下の人々が）楽しむのには後れて（自らは）楽しむ」こと（がかなっているのだから）、我がご主君（元次さま）は、どうして恥ずかしくお思いになることがあろうか（、その必要はない）。

元禄戊寅（つちのえとら）の年（＝元禄十一年）仲秋（＝八月）の（某）日　　桂氏方直［字は、敬義。號は、蟠臥］誌す。

［注釈］
○松屋
　毛利元次の建てた亭。文中にその由来を述べている。なお、その位置については、河合裕の『藩史』巻一上「松屋御茶屋御普請之事」の条に「元禄十年丁丑秋御城之東ニ当り松屋御茶屋御普請成」（『徳山市史史料』上冊四五一頁下）とあり、この記とともに『徳山名勝』収める、宇都宮遯庵の「松屋十八景詩并序」の序には、「拒棲息堂数百歩而在林麓高原之地、其景象之為佳麗也。」とある。
○十八景
　当時の徳山藩領内の十八の景勝として毛利元次が選んだもの。
　中国の南宋末期おける瀟湘八景を端緒とし、日本の近世において近江八景に代表される、八景や十景の例は多く、特定の地域における景勝を選定し、文学的表現の標的とすることは、当時の流行であった。
　元禄時代に十八もの景を取り上げた例は珍しい。独立行政法人 国立環境研究所による「研究報告１９７号 Research Report from the National Institute for Environmental Studies, Japan No. 197, 2007 R-197-2007 八景の分布と最近の研究動向 The Distribution of and Recent Research on Hakkei (Eight Views) of Japan」中の、８資料 「８・１日本の八景データ A List of Japanese Hakkei 榊原映子」を通観する限り、確実に元禄期に確定している例で、十八とい

う数に達しているのは、この例のみである。
＊以上は、表題について。なお、この文章は、文体、構成において、北宋　欧陽脩の「醉翁亭記」を手本としていると感じられる。

○元禄丁丑秋　元禄十年（一六九七年）秋

○賁臨
「賁」の読みは、「ひ」。客の来訪を敬っていう語。『詩経』小雅「白駒」に「皎皎白駒、賁然來思。」とあるに基づく語であり、朱熹の『集傳』には、「賁然、光采之貌也。」とある。来訪する者に輝くばかりの素晴らしさのあることをいう言葉である。光臨に同じ。

○周陽徳山
周防国徳山。現在の山口県周南市徳山。

○主元次君
徳山藩第三代藩主、毛利元次。

○腹東南背西北
腹は正面、背は背後をいう。現実の地形を考慮して、正面を海側、背後を山側と解釈した。

○標的
手本。規範。『世説新語』言語篇「王中郎令伏玄度、習鑿齒論青楚人物」の劉孝標の注に引用された「王中郎傳」に「坦之氣度淳深、孝友天至、譽輯朝野、標的當時。」とあって、この意味の用例が見える。

○僕
記の作者、桂方直（かつら かたなお）をさす。名前の読みは、小川宣『周南風土記』に「かたなお」とルビをふってあるのに従った。
＊以上、松屋、及び松屋十八景の由来を述べ、方直自身がこの記を誌すにいたったゆえんを述べる。

○斧斤長赦
長く切り倒されることがなかったことをいう。北宋　黄庭堅の詩「武昌松風閣」に「老松魁梧數百年、斧斤所赦今參天。」とある。

○翁蔚
草木が鬱蒼と生い茂るさま。漢　張衡の「南都賦」に「晻曖翁蔚、含芬吐芳。」とあり、李善の注に「晻曖翁蔚、言草木闇暝茂盛也。」（『文選』巻一）とある。

○不辨
区別がないこと。

○城山
城山に該当しそうな場所を特定するのは難しい。現在の地図地形からは、徳山藩藩主の館の背後にあった金剛山（岐山）、あるいは、杉氏の居城のあった山が該当箇所として有力である。しかし、『地下上申』徳山村に「お茶屋壱ヶ所　御屋敷山之東ニ有之」（『徳山市史史料』上冊二六九頁上）とあり、このお茶屋が松屋のあった所を想定させるため、藩主の館の背後の山は「御屋敷山」と呼ばれていたようであり、城山と明確に記す例が見えないため、これを城山と断定するのはためらわれる。
『地下上申』徳山村には、「古城山弐ヶ所」と項を立て、さらに以下の記述がある（『徳山市史史料』二六九頁下）。「壱ヶ所　一ノ井手ニ有之　但城主杉次郎左衛門元相居城ニ而其節の屋敷は今辻といふ所の後田ノ中ニ有之、今に杉屋敷とほのぎ名に申し傳候、此辺知行所ニて可有御座候へ共何程いつれ迄と申分り不分明候事」、「壱ヶ所　馬屋に有之　但城主申傳等無御座候事」。
以上、候補は金剛山、古城山、馬屋の丘の三箇所となるが、由来のはっきりしていること、松屋から眺めることを考慮して、ひとまず杉氏の城があった「古城山」としておく。

○茂陰
晋　何劭の詩「贈張華」に「舉爵茂陰下、攜手共躊躇。奚用遺形骸、

忘筌在得魚。」とあり、呂延済の注に「済曰、爵、酒盃。擧於林木茂陰之下、躊躇緩歩也。」（文選巻二四）とある。

○日迫虞淵

虞淵は、日の没するところの意。晋 向秀の「思舊賦」の序に「于時日薄虞淵、寒冰淒然。」とあり、李善は『淮南子』天文訓「日至於虞淵。是謂黄昏。」を引いている（『文選』巻一六）。

○鴉投棲處

鴉が寝ぐらに帰っていくの意。唐 劉長卿の詩「題虎丘寺」に「日映千里帆、鴉歸萬家樹。」（『唐詩類苑』巻一七四に「題武丘寺」として収録）とある。

○華鯨哮吼

「華鯨」は、鐘のこと。銘文を刻された立派な鐘を「華」といい、鯨を彫刻した撞木を「鯨」という。『防長寺社由来』徳山領徳山村興元寺の項、「鐘楼門棟札写」に、万治二年に徳山藩初代藩主毛利就隆が鐘楼を寄進したことが見え、鐘の銘文を載せるが、その銘の冒頭に「助仏宣化、鋳箇華鯨。」とある（第七冊一〇三頁上～一〇四頁上）。「哮吼」は、（大声で）ほえること。『碧巌録』第五十八則の頌に「象王嚬呻、獅子哮吼。」とある。ここでは、（鐘の音が）大きく響くの意味。なお、「華鯨哮吼」は、鐘銘の文にしばしば用いられる表現である。

○興元梵刹

曹洞宗萬徳山興元寺のこと。現在の山口県周南市大字上一ノ井手にある。杉氏の菩提寺として知られる。『防長寺社由来』徳山領徳山村興元寺の項、「由来書」に詳しい。第七冊九九頁下）。「梵刹」は、寺院の意（梵は清浄、刹は場所の意）。

＊以上の二景は、季節変化、日々において変わらぬもの。

○白浪滔天

「滔」の読みは「はびこる」。みなぎりあふれるの意。『書経』益稷に「禹曰、洪水滔天、浩浩懐山襄陵。下民昏墊。」とある。また、普　傅玄の「擬四愁詩」其一に「驚波滔天馬不儷、何為多念心憂世」（『玉台新詠』巻九）と見える。

○香風満袖

唐　貫休の詩「春遊靈泉寺」に「因尋古跡空惆悵，滿袖香風白日斜。」とある。なお、『徳山雑吟』に桂方直の「馬場桜花」と題する五言律詩が収められている。以下にあげておく。「高梢参彼蒼、大可蔽牛羊。只不行庖地、毎為馳馬場。秦雲凝倚畳、蜀浪激飛揚。吹満春風面、著人韓寿香。」

○馬場

山口県周南市内に「桜馬場」という名のバス停が現在もある。当時の馬場は、現在の徳山小学校の前の広い道路に沿って設けられていたので、現在、桜のアーチとして知られるものとは異なり、松屋からは左右に広がる形で見えたはずである。

河合裕『藩史』巻之七　雑事之部の「徳山桜馬場間数并士手之桜木植継之事」に、改易の際にすべて宗藩によって伐られていた桜を改めて二百十九本植えた事を記しており、「往古より在来名木之桜四百本、御還付節御本家より伐取御売払相成候付而也」とある。元次時代の馬場の桜花は、さぞかし見事なものであっただろう。

○逸興

格別に趣き深いこと。唐　王勃の「滕王閣序」に「遙襟俯暢、逸興遄飛。」とある。

○維夏

『詩経』四月に「四月維夏、六月徂暑」とある。

○薫風南自來、亭上生微涼

唐の文宗皇帝が作った「人皆苦炎熱、我愛夏日長。」に、柳公権がつけた二句「薫風自南来、殿閣生微涼。」による（『唐詩記事』巻

四〇）と思われるが、これにはさらに、北宋　蘇軾が四句を加えたものが「足柳公権連句」と題して、『古文真宝前集』に収められている。しかし、蘇軾の加えた四句によって、直諫の詩となっている点が、この記の基本的スタンスである「称賛」に合致しない。

むしろ、『碧巌録』の著者、圜悟克勤禅師についての、一人の修行僧が「三世の諸仏の悟りの境地とは如何んなのか」と問うたのに、雲門文堰禅師は「東山水上を行く」と答え、この雲門禅師の語に対して、圜悟禅師が「薫風自南来、殿閣 微涼を生ず」と答えたところ、これを聞いた、臨済宗における公案禅の大成者である大慧宗杲禅師が悟ったという話（『續傳燈録』巻三五）に基づくと考える。何ものにもとらわれぬ境地をいう。

○相島峻嶺

「相島」は、現在の山口県周南市大島。現在は島ではなく地続きとなっている。『元和御打渡牒』『寛永御打渡牒』には、ともに「相島村」（ルビ「ヲゝ」が付してある）として石高が記され（『徳山市史資料』上冊一八九頁、二〇六頁）、『地下上申』大島村に「但当村往古ハ相之字ヲ書来候所ニ御先々代ニ大之字ニ御改被仰付候事」（『徳山市史史料』上冊二五九頁下。先々代とは、徳山藩初代藩主 毛利就隆をさす）とある。

○峻嶺

険しい嶺のこと。現在の太華山が、これに該当する。晋　王羲之の「蘭亭集序」に「此地有崇山峻嶺、茂林修竹。」とある。

○晴鏡飛上

晴鏡は、澄み切った光を放つ満月のことをいう。『錦繍段』の冒頭に置かれた、金　呂中孚の詩「春月」に「柳塘漠漠暗啼鴉、一鏡晴飛玉有華。」とある。なお、「飛上」については、漢 無名氏の古絶句に「何當大刀頭、破鏡飛上天。」（『玉台新詠』巻一〇に古絶句四首其一として収める）とあるのが、意識されていよう。

○高揚明輝

空高くに明るい輝きをかかげるの意。東晋　陶淵明の詩「四時」に「春水滿四澤、夏雲多奇峰。秋月揚明輝、冬嶺秀孤松。」（『古文真宝』前集）とある。

○大河内

現在の大内町。山口県周南市周陽1丁目に大河内バス停がある。また、『地下上申』徳山村小村小名付の項には「大河内」の地名が見える（『徳山市史史料』上冊二六七頁上）。現在の下松市大河内は、方角から考えて該当しないと判断した。

○回眸

視線をめぐらせること。唐　白居易の「長恨歌」に「回眸一笑百媚生、六宮粉黛無顔色」とある。

○八坳

「坳」の訓読みは、「くぼ」。周南市立図書館のウェブサイトに公開されている『徳山名勝』写真版に見える「松屋十八景詩并序」の中の、「八坳淡雪」に「ハチクボ」とルビが記されている（第一一頁）。『地下上申』徳山村の隣村境目書に「なめら峠山、峠山、八が久保山」（『徳山市史史料』上冊二七〇頁下）とあり、『御国廻行程記』（有馬喜惣太 筆）に、禅宗興元寺を興元寺山の中腹に描き、その背後に一段高く山を描いて「八久保山」と記している山が、これに該当する。

○滕六降雪

「滕六」は、雪を降らせる神の名。唐　牛僧孺『玄怪録』の蕭志忠の条に、「黄冠曰、蕭使君毎役人、必恤其饑寒、若祈滕六降雪、巽二起風、即不復遊獵矣。」とある。

○玉塵

雪の喩え。唐　白居易の詩「酬皇甫十早春對雪見贈」に「漠漠復霧雰、東風散玉塵。」とある。

○驢背詩思

「詩思」は、詩を作りたいという思いのこと。「驢背詩思」とは、唐の相国であり、詩に巧みであった鄭綮が、詩の新作の有無を問われて、詩を作ろうとの思いは、灞橋の上、風雪の中、驢馬の背にいる時に生まれるもので、ここにはそんなものはないと答えた故事による。『唐詩紀事』巻六五に、「古今詩話曰、……。或曰『相國近為新詩否？』對曰『詩思在灞橋風雪中驢子上、此處何以得之？』蓋言平生苦心也。」とある。

○勃然

「勃然」は、急に湧き起こるさま。『荘子』知北遊篇に「注然勃然、莫不出焉」とある。

＊以上の四景は、春夏秋冬の各季節の見どころを挙げたもの。

○泉原

現在の周南市泉原町。丘があり、そこに現在、病院がある。『地下上申』徳山村の小村小名付の項に「泉原」の地名が見える（『徳山市史史料』上冊二六七頁上）

○映楓入松。

（秋には）楓の紅葉に照り映え（冬には）松林に射し込むと解釈した。北宋　欧陽脩の詩「夕照」に「無憀照湘水、丹色映秋楓。」（『居士外集』巻五）

＊この景は、文中に楓、松とあるところからみて、秋と冬を通じての近景であり、これをもって季節の景のしめくくりとしたのであろう。

○艇艇

「艇」は、小船。ここでは、漁師の船のこと。

○帆風

『徳山名勝』に「風に帆かけて」と読ませているのに従い、「追い風に帆をかけて」と解釈する。

○濱崎

徳山の港（現在の周南市築港町）。『御領内町方目安』によれば、東浜崎と西浜崎とがあり、「両浜崎丁」と記している（『徳山市史史料』上冊二二二～二二三頁下段）。

○魚市

魚を売り買いする市。語例としては、唐　方干の詩「越中言事二首　其二」に「沙邊賈客喧魚市、島上潛夫醉笋莊。」と見える。

○沽衒

「沽」は、買うこと。「衒」は、売ること。

○喧嘩

大声をあげ、騒ぐこと。『後漢書』巻六六　陳蕃伝に「今京師囂囂、道路諠嘩」とある。

○譊譊

言い争うこと。収拾がつかないほどに騒ぎ乱れる様子をいう語でもある。『荘子』至樂篇に「彼唯人言之惡聞、奚以夫譊譊爲乎」とある。

○蛇島

読みは、「さしま」。現在の周南市徳山湾に浮かぶ、周囲二㎞の無人島である。『地下上申』粟屋村の項に「佐島」と見え、「佐島とハ海中江差出たる小島故か差島と申候」（『徳山市史史料』上冊二五九頁下～二六〇頁上）とある。

○崛起

険しく突き出すこと。南斉　謝朓の詩「侍宴華光殿曲水奉敕為皇太子作詩」に「高殿弘敞。禁林稠密。青磴崛起。丹樓間出。」とある。

○屋上

「屋」は、松屋のこと。松屋にあって（蛇島を見る）の意味に解釈した。

○盆石

他にはない趣きの石を盆の上におき、鑑賞すること。中国北宋期に

盛んとなり、日本の五山禅僧の間で流行した。

○不宜乎

（感嘆して、）もっともであるなぁ。「宜」は、理にかなうの意。

○席上観海

席上は、「松屋の席において」の意。「観海」は、『孟子』尽心章句上の「故觀於海者難爲水、遊於聖人之門者難爲言。」に基づく語。

○波瀾千里、天光一碧、

北宋 范仲淹の「岳陽楼記」に「至若春和景明、波瀾不驚、上下天光、一碧万頃。」とある

○鶴汀鳧渚

鶴の遊ぶみぎわと、かものいるなぎさ。幽静な水辺の景色をいう。唐 王勃の「滕王閣序」に「鶴汀鳧渚、窮島嶼之縈回、桂殿蘭宮、列岡巒之体勢。」とある。

○化工

自然の造化のこと。漢 賈誼「鵩鳥賦」に「且夫天地爲鑪兮、造化爲工」（『文選』巻）とあるのに基づく語。唐 元稹の詩「春蟬」に「作詩憐化工、不遣春蟬生。」見える。

○鎔冶

金属を溶かして鋳物にすること。ここでは自然による造形のことをいう。宋 喩良能の詩「石鍾山」に「南北兩石鍾、上下一水側。造物妙鎔冶、蜚廉巧撞擊。」とある。

○非所人力布置按排

人間の能力で配置しバランスを取れるものではないと解釈した。陳琳の「檄吳將校部曲文」に「若此之事、皆上天威明、社稷神武、非徒人力所能立也。」（『文選』巻四四）とある。「布置」は、南朝梁 劉勰『文心雕龍』書記篇に「布置物類、撮題近意、故小券短書、號為疏也。」とある。「按排」は準備すること。唐 白居易の詩「諭友（友を諭す）」に「推此自豁豁、不必待安排。」とある。

○漁舟亂雜

漁船が入り乱れていること。「亂雜」は、秩序がないこと、入り混じること。韓愈「送孟東野序」に「其爲言也、亂雜而無章。」とある。

○歌曲

漁歌を歌うこと。

○喚聲

叫び呼ばわる声。

○金崎

現在の山口県周南市大津島馬島金崎（金ヶ崎？）。ただし、金崎は馬島の南側にあるので、松屋からは、見えないはずである。ここは、濱崎に帰ってくる船とは、逆の方角に向かう船々の様子を言うのであろう。なお、『地下上申』大津島村の項に「馬島」の名は見え、船数を「六艘」として、注記に「但馬島之分猟船こち網三月より十月比迄鯛小鯛猟仕候事」（『徳山市史史料』上冊三一〇頁下）とあるが、地名としての金崎は見えない。

○振古

大昔。『詩経』周頌「載芟」に「匪今斯今、振古如茲。」とあり、朱熹の集伝に「蓋自極古以來已如此矣。」とある。

○雨奇晴好爲西湖絶勝

「雨奇晴好」は、北宋の蘇軾が、中国の西湖の様子を詠んだ詩、「飲湖上初晴後雨 二首」其二に「水光瀲艶晴方好、山色空濛雨亦奇。」とあるのに基づく語で、晴れであれ雨であれ、それぞれにすぐれて趣のある景色であること。晴好雨奇ともいう。「絶勝」は、この上なく優れている（場所あるいは景色の）こと。

○野島

現在の山口県防府市野島。前の金崎よりもさらに南にある。『地下上申』に佐波郡 野島の項がある（『徳山市史史料』に収録の『地下

上申』には、野島は含まれていない。山口地方史学会編集『防長地下上申』全四冊　昭和五四年　マツノ書店刊の第二冊四七〇頁上～四七一頁下）。

○過雨

通り雨のこと。盛唐 杜甫の詩「晩晴」に「村晩驚風度、庭幽過雨沾。」とある。

○執

結びつけるの意。

＊以上の五景は、すべて海に関するもの。

○列松當南

当時の徳山は、街道が海沿いを通り、松屋から見て南にあたる街道沿いには、松並木が続いていた。山口県文書館のサイトに、高画質画像データをダウンロードできるところがあり、その中の伊能大図No.3（http://ymonjo.ysn21.jp/user_data/upload/File/HQ_DL/inou03_data.jpg）には、その様子が描かれている。また、絵図である『御国廻行程記』（有馬喜惣太 筆）には、街道沿いだけではなく、海岸線沿いに二列の松並木が整然と並ぶ様子が、はっきり描かれている。解釈においては、ひとまず街道沿いとしたが、「海岸沿いに整然と並ぶ」と取るべきかもしれない。

○齊整無長短

「齊整」は、整然としているさま。西晋 楊泉の「草書賦」に「或斂束而相抱、或婆娑而四垂、或攢翦而齊整、或上下而參差、或陰岑而高舉、或落擇而自披。」（『芸文類聚』巻七四）とある。

○左右雍道

「雍」は「擁」に同じ。包みこむこと。街道を左右から包みこむように松並木がつづいているさまをいう。

○何其稠茂乎。

「稠茂」は、隙間もないほどに茂っているさま。松並木が途切れることなく続いていることをいう。

＊この景は、海岸の景であり、海と陸の境界を示している。これ以降の景は、すべて陸上の、松屋から見た場合の近景となる。

○策羸

「策」は、鞭打つこと。「羸」は、痩せ馬。

○相呼相應

北宋 欧陽脩の「醉翁亭記」に「至於負者歌於途、行者休於樹、前者呼、後者應、傴僂提攜、往來而不絶者、滁人遊也。」とある。

○前路樵人

「前路」は、前にある道のこと。ここでは、松屋の前の道。晉 陶潛「歸去來辭」に「問徵夫以前路、恨晨光之熹微。」とある。「樵人」は、樵夫に同じく、ここでは「柴刈りに来る人」の意味に解釈した。

○民居富饒

「富饒」は、余りあるほどに富み豊かであること。『史記』巻一〇六 吳王濞列伝に「吳有豫章郡銅山、濞則招致天下亡命者盜鑄錢、煮海水爲鹽、以故無賦、國用富饒。」とある。

○辻村

現在の山口県周南市辻町。『地下上申』徳山村の小村小名付に、「辻」の名が見える（『徳山市史史料』上冊二六七頁上）。

○炊煙

煮炊きの際に立ちのぼる煙。

○肥瘠

肥えているか痩せているかの意。『禮記』月令に「仲秋之月、案芻豢、瞻肥瘠、察物色。」とある。

○福田

現在の周南市徳山の福田寺原にある、曹洞宗金砂山福田寺。『防長寺社由来』徳山村福田寺に由来書が翻刻されている（第七冊一〇六頁上～一〇七頁下）が、崖に関する記述は見えない。現在の福田寺の立地は、小高い丘の上であり、その西側（松屋から見えたと想定される側）は緑で一面に覆われた崖のように見える。ここでいう崖とは、そのことをいうのであろう。

○千仞之壁崕

はるかに高い崖。晉 張載の「劍閣銘」に「是曰劍閣、壁立千仞、窮地之險、極路之峻。」（『文選』巻五六）とある。なお、「壁崕」は、唐 李白の詩「秀華亭」に「曜日凝成錦，凌霄增壁崖。」と見える。

○如立十里歩障也

「歩障」は、錦の幕を張って立てたものをいう。『世説新語』汰侈篇に「君夫作紫絲布歩障碧綾裏四十里、石崇作錦歩障五十里以敵之。」とある。

○爽嵐入松

「爽嵐」は、字義通りなら、爽やかさを感じさせる山靄の意。ここは靄を松林に吹き入れる風の意味合いも含むものとして解釈した。

○濤聲徹耳

「濤聲」は、松籟の音。松に吹く風によって起きるうなりで、波のような音。「徹」は、貫き通すの意。

○午睡半驚

「午睡」は、昼寝。「驚」は、醒めるの意。

○恍如泊江湖

「恍」は、我を忘れているさま。この部分は、『荘子』大宗師篇に「孔子曰、魚相造乎水、人相造乎道。相造乎水者、穿池而養給。相造乎道者、無事而生定。故曰、魚相忘乎江湖，人相忘乎道術。」とあり、江湖では魚が魚としての自身の存在を忘れてのびやかにいられるとあるのをふまえた表現。

○民邦本、本固邦寧

「本」は、国家の根本のこと。『書経』五子之歌に「民惟邦本、本固邦寧。」とあり、孔伝に「言人君當固民以安國。」、孔穎達の疏に「民惟邦國之本、本固則邦寧。」とある。

○耕耘収蔵

田畑を耕し、雑草を除き、作物を収穫すること。広く農業を指す。漢 桓寛『鹽鐵論』散不足に「春夏耕耘、秋冬收藏。」とある。

○朝出晩帰

朝に出かけ、日暮れに帰る。北宋 欧陽脩「醉翁亭記」に「朝而往、暮而歸、四時之景不同、而樂亦無窮也。」とある。

○晝于茅、宵索綯

『詩経』豳風 七月に「晝爾於茅、宵爾索綯。」とあり、鄭箋に「夜作絞索、以待時用。」とある。

○勤力以養人。

「勤力」は、力を尽くすこと。『史記』巻三殷本紀に「維三月、王自至於東郊。告諸侯群后『毋不有功於民、勤力迺事。』」とある。「養人」は、人を養育すること。『孟子』離婁章句下に「以善養人、然後能服天下。」とある。

○屋前對田

「屋」は、松屋のこと。対は、面と向かうこと。

○干戈横偃

「横偃」は、横たえたままにすると解釈した。『史記』巻五五留侯世家に「殷事已畢、偃革爲軒、倒置干戈、覆以虎皮、以示天下不復用兵。」とある。

○人人置枕泰山

「置枕泰山」とは、泰山のように静かに安定して動くことがないことをいう。北宋 黄庭堅の詩「奉同子瞻韻寄定國」に「收身薄冰釋、置

枕泰山安。」とある。なお、黄庭堅の詩中の「泰山安」は、漢 枚乗の「七發」に「變所欲爲、易於反掌、安於泰山。」（『文選』巻三四）とあるのに基づく表現である。

＊以上、陸上の五つの近景。

○當今代

今の時代になって。元次侯の善政によってという意味合いである。

○先憂而憂、後樂而樂

（天下国家の）憂いごとには（人々に）先んじて心配し、（天下の人々が）楽しむのには後れて（自らは）楽しむ。いわゆる、「先憂後楽」。范仲淹の「岳陽楼記」に「先天下之憂而憂，後天下之樂而樂。」とあるのによる。

○我君公

毛利元次のこと。

○何愧之乎

「愧」は、恥じ入ること。

＊結びとして、これらの十八景が、元次侯の善政によるものであることを述べ、元次侯を褒め称えている。

○元禄戊寅仲秋日

元禄十一年（一六九八年）八月某日

○桂氏方直

桂 方直（かつら かたなお）。関連の文献は、すべて「当代一流の学者」として、伊藤東涯、長沼玄珍、中島義方と並べて、彼の名を記しているが、前記のように実態が不明であり、今後の調査が必要である。